



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	古代中国における「意象」に関する研究
Author(s)	凌, 玲
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16977号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16977
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99821
Type	doctoral thesis
File Information	Ling_Ling_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 凌 玲

審査委員	主査	教授	近 藤 浩 之
	副査	准教授	吉 田 勉
	副査	教授	林 寺 正 俊
	副査	特任教授	舩 和 順 （高等教育推進機構）

学位論文題名

古代中国における「意象」に関する研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文では、先秦から南朝梁に至る思想的展開の中で形成された「意象」という思惟構造に注目し、主に『莊子』『周易』『論衡』『文心雕龍』等の文献を対象としつつ、「意象」という概念の淵源や成立から展開さらに變容への過程を四段階に区分して検討し、その思惟構造と意味内容について、多角的に考究している。「意象」に関するその四段階を、①種苗段階、②萌芽段階、③形成段階、④變化段階に分けて論じる。その論點に従って、とりわけ以下の四點を、中国思想研究における新しくユニークな觀點と方法によるものとして高く評價できる。

①『論衡』亂龍篇に見える「象類」は、未知から既知への推論を目的とするものではなく、ある事物を別の事物に假託することにより象徴的な意味を與える表現として理解され、また、その表現は『莊子』齊物論篇の「以指喻指之非指、不若以非指喻指之非指也（指を以て指の指に非ざるを喻すは、指に非ざるを以て指の指に非ざるを喻すに若かざるなり）」云々という文章に示された概念と實物との乖離をめぐる認識と通底することを指摘した。さらに、『莊子』では言語と實物との乖離が否定的に捉えられるのに對して、『論衡』ではその乖離を前提とした上で概念を「禮」の實踐へと接續し象徴の實効性を肯定した認識論を展開するといった特色があることを指摘した。

②『周易』は、あらゆる現象は陰陽の二氣の生成變化によるとし、それを六十四卦という圖象で表現するが、『論衡』亂龍篇において王充は、『周易』繫辭上傳の「立象以盡意（象を立てて以て意を盡す）」を踏まえつつ、言語のみでは表現しきれない「意」を「象」によって還元する「意象」原理を導入して「意象」という表現を使用したことを論證した。

③『論衡』亂龍篇・遭虎篇・商蟲篇における事例の検討を通して、土龍・虎・蟲に附與された「意象」の意味内容について、王充の判断と態度を考察すると、「意象」の判断基準として「禮」を使用したこと、また、これが『論衡』全體を貫く「疾虚妄（虚妄を疾む）」という主旨と密接に関わること、さらに、王充は「禮」に拘泥したがために、虎・蟲の有する文學的意義を必ずしも重視しなかったことを論じた。

④『論衡』と『文心雕龍』とは、内容上から見て性格を異にする書物であるが、『文心雕龍』の文學理論は『論衡』に見える文學関連の議論から一定の影響を受け、それを展開している。兩書の「意象」は、繼承關係にありながらも、『論衡』では「意象」を「禮」の象徴と位置づけるのに對して、『文心雕龍』では「意象」が文學創作論上の表現に轉化されるなど、その意味と用法が少なからず異なる。また、漢代では、「禮」を重んじて「詩言志（詩は志を言ふ）」という考え方を基本とするので「意象」が民の教化を擔っているのに反して、六朝時代では、玄學思想の風潮を受け、「詩緣情（詩は情に緣る）」という文學觀が主流であり、それが『文心雕龍』の「意象」理解に色濃く反映されていることを明らかにした。

なお、第一章は日本中國學會第77回大會（九州大學、2025年10月12日）で行った研究発表に基づく。第二章は『中國哲學』第51號（北海道大學中國哲學會、2024年）に、第三章は『北海道大學文學院研究論集』第23號（北海道大學大學院文學院、2024年）に、第四章は『中國哲學』第52號（北海道大學中國哲學會、2025年）に掲載済みであり、すでに一定の評価を得てい

る。また、附論は『北海道大學文學院研究論集』第25號（北海道大學大學院文學院、2026年）に掲載予定である。ほかの序章、終章は書き下ろしである。

・学位授与に関する委員会の所見

審査の過程において、四段階に区分する名稱の再検討や、「意象」だけにとどまらず序章で論じられている「書一言一意」と「象」との関係にかかわる思想の展開への言及や、南朝梁以降の考察および中國思想史上の位置付け（見通し）への言及が望まれること、参考文献を個別に各章の注に示してはいるが参考文献一覧が完備されていないこと等の指摘がなされた。ただし、これらの問題点は、容易に修正し得るもの（すぐに修正すべき所）と、むしろ今後の発展として期待できるものとであり、本論文の優れた成果と価値を本質的に損なうものではない。「意象」をめぐる中國思想研究の新しい方向性を示すような成果であることに変わりはない。

以上に基づき本審査委員会は、本論文に示された申請者の研究成果を高く評価し、全員一致で本論文が博士（文學）の學位を授與するにふさわしいものであるとの結論に達した。